新潟大学全学英語教育カリキュラム改定の成果検証（２）

ハドリー浩美

Abstract

This is a continuation research into the evaluation of the revised English language education curriculum at Niigata University, Japan. In this paper, the author attempted to evaluate the curriculum for the academic years of 2015 and 2016, by using the same types of data which had been used for the original 2011 - 2014 study: TOEIC IP scores, hours spent out-of-class in e-learning, student evaluation of classes, teacher assessment of student achievement, and class size. The overall positive effect of the revised curriculum was again suggested by the TOEIC results and the amount of hours spent on e-learning. The findings also revealed the need to improve reading classes in general, to promote effective self-directed learning, and to standardize teacher assessment of student achievement in class.

Keywords: English language curriculum evaluation, tertiary education, EFL, EGAP, TOEIC, student evaluation

１．背景と目的

新潟大学では、2011年度に全学英語教育カリキュラム改定を行い、質的改善（一般学術目的の英語運用能力の育成）および量的改善（１年次のコマ数倍増、e-learning教材による課外学習の促進）に取り組んできた（新潟大学全学教育機構英語教育企画開発室 2010）。ハドリー（2017）では、初年度から４年間（2011年度～2014年度）にわたる改定版カリキュラムの成果を検証した。本研究ではその手法を踏襲し、成績評価、授業評価、TOEIC IP、課外学習状況等のデータを分析することにより、2015年度および2016年度の成果を検証する。なお、2017年度のクォーター制導入により、本カリキュラムによる全学英語教育は2016年度が最終年度となった。

２．全学英語教育カリキュラム改定後の英語科目および履修パターン

2005年度から2010年度の全学英語教育カリキュラム（旧カリキュラム）における英語科目および標準的な履修パターンについては、ハドリー（2017）を参照されたい。2011年度以降の改定版全学英語教育カリキュラム（新カリキュラム）における標準的な履修パターンは次のとおりである。１年生は、旧カリキュラム同様、第１学期には入試成績等に、第２学期には第１学期末に受験したTOEIC IPスコアに基づく学部別・習熟度別クラスにて

学習する。第１学期には英語のインプットを重視した「アカデミック英語（リーディング）」（１単位、日本語母語話者教員が担当）および「アカデミック英語（リスニング）」（１単位、主に英語母語話者教員が担当）を履修し、第２学期にはアウトプット中心の「アカデミック英語（ライティング）」（１単位、上位クラスは英語母語話者教員、下位クラスは日本語母語話者教員が担当）および旧カリキュラムから引き継いだ「基礎英語」（１単位、TOEIC 470以上で単位認定）を履修する。これに加えて、選択科目として「発展英語」「応用英語」が用意されているほか、旧カリキュラム同様、英語の重点学習を選択した理学部・工学部の学生には「理工英語読解」が必修となる。シラバスに関しては、「発展英語」では「科目のねらい」「学習の到達目標」の項目が、「アカデミック英語」科目群ではそれに加えて「科目の概要」の項目が統一されている。具体的な授業計画や成績評価、使用教材については、担当教員の専門や個性を十分に生かせるよう担当教員に一任されている。ただし、「アカデミック英語（リーディング）」では、全クラスにてe-learningによる課外学習を20％の割合で成績に反映させている。

３．成果検証

TOEIC IPスコア、NetAcademy2を利用した課外学習時間数、学生による授業アンケート調査結果等から、2015年度および2016年度の英語教育の成果を考察する。

3.1. TOEIC IPテスト

3.1.1. 方法

履修者の英語運用能力を把握するために、新１年生全員が１年次７月に受験するTOEIC IPテストのスコアについて、各年度の平均値を求めて分散分析を行った。ただし、すでにTOEICを受験して「基礎英語」等の単位認定を受けた学生、および初修外国語の重点学習により英語を履修する必要がない法学部の学生は受験を免除されているほか、個人的な事情で受験できなかった学生も若干存在する。加えて、2014年度からは、経済社会を牽引するグローバル人材育成支援（GGJ）事業の実践英語プログラムS.P.A.C.E.（Skills Program for Academic and Content English）を履修する１年生にはTOEFL ITPの受験が課せられたため、TOEIC IPは任意受験となっている。

3.1.2. 全体的な結果と考察

表１は、2015年度および2016年度入学者のTOEIC IPテストのスコアを2014年度までの表（ハドリー　2017）に追加したものである。合計点の平均値は新カリキュラム初年度以降、456.9、468.8、482.1、489.8、482.5、489.0であった。分散分析では有意差が認められ（$F(5,13459)=26.73, p<.001$）、Tukey法による多重比較では、2011年度から2013年度までは統計的に有意な上昇が続いたことがわかった。標準偏差は2015年度まで115.3、115.5、118.3、123.2、123.7と推移し、旧カリキュラム時代（最小107.7、最大114.9）と比較しても得点のばらつきが拡大していたが、2016年度は112.5まで縮小した。

一方、国立大学１年生の2011年度から2016年度の全国平均（受験時期不明）は、順に452、451、456、455、462、461（リスニング・セクション：246、247、249、249、252、252、リーディング・セクション：206、204、207、207、210、209）であった（国際ビジ

ネスコミュニケーション協会TOEIC運営委員会提供資料　2012、2013、2014、2015、2016、2017)。合計点では新潟大学が全国平均よりそれぞれ約５点、18点、26点、35点、21点、28点上回った。

表１　TOEIC IPスコアの記述統計量

年度	受験者数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
2005	2199	427.8	108.7	145	910
2006	2193	426.1	109.5	90	945
2007	2214	431.3	108.1	150	975
2008	2225	417.4	107.7	150	955
2009	2246	428.7	113.0	15	960
2010	2208	452.7	114.9	145	975
2011	2249	456.9	115.3	145	980
2012	2236	468.8	115.5	145	955
2013	2226	482.1	118.3	145	965
2014	2243	489.8	123.1	145	975
2015	2251	482.5	123.7	10	960
2016	2261	489.0	112.5	135	975

3.1.3. 学部（学科）別の結果と考察

学部（学科）別平均値でみると、旧カリキュラム時代から、医学部医学科が最も高く経済学部夜間主コースが最も低い傾向が続いている。2015年度および2016年度には、医学部医学科の平均値が順に661.1（標準偏差105.8)、647.5（標準偏差93.1）であったのに対し、経済学部夜間主コースの平均値は307.0（標準偏差105.5)、294.1（標準偏差81.1）であった。

新カリキュラム移行後における学部内での最大値と最小値の差は工学部で最も大きく、2011年度の差は800、2012年度810、2013年度820、2014年度805、2015年度825、2016年度770であった。なお、工学部における2012年度、2013年度、2014年度、2015年度、2016年度のTOEIC IP最高得点者は留学生であった。

3.2. ネットワーク型英語学習教材NetAcademy2を利用した課外学習状況

3.2.1. 方法

新カリキュラムでは、TOEIC 470未満の１年生を対象とした「基礎英語」履修者に加えて、１年生全員を対象とした「アカデミック英語（リーディング)」においても同教材による課外学習を課すことにより、英語学習の量的改善を図った。課外学習状況の検証には、１年生のNetAcademy2による課外学習総時間を用いた。これは、システム内に記録されている各コースの学習履歴から学習時間を出力して合計した時間数である。

3.2.2. 結果と考察

１年生のNetAcademy2による課外学習総時間は、2011年度が20,542時間、2012年度34,428時間、2013年度38,631時間、2014年度34,353時間、2015年度34,901時間、2016年度37,844時間であり、2012年度以降、35,000時間前後を維持している。

これを単純に入学者数で割ると一人当たりの年間学習時間は、2011年度が８時間40分

(2,370名)、2012年度14時間44分（2,338名)、2013年度16時間28分（2,347名)、2014年度15時間10分（2,356－92＝2,264名)、2015年度15時間34分（2,346－104＝2,242名)、2016年度16時間47分（2,358－103＝2,255名）となる。なお、2014年度以降については、医学部・工学部・法学部の実践英語プログラムS.P.A.C.E.選抜履修者にはNetAcademy2による課外学習が免除されたため、入学者総数からS.P.A.C.E.履修者数を差し引いて計算した。

英語の授業時間数の増加が望めない状況にあって、場所と時間の制限のないe-learning教材による学習環境を整備し課外学習として成績に組み込んだことにより、授業時間外での学習時間が一定量確保されたと考えられる。

3.3. 学生による授業評価

新潟大学教育・学生支援機構学位プログラム支援センターが学期毎に実施する学生による「授業アンケート」のデータを用いて、科目別「満足度」の推移を観察した。旧カリキュラムとの比較に関しては、ハドリー（2017）を参照されたい。さらに、斉田（2009）の手法を参照しつつ、新カリキュラム最終年度（2016年度）における「出席状況」「自学自習」「達成感」「満足度」、ならびに「成績」「TOEIC IPスコア」「履修者数」のデータを分析した。

3.3.1. 科目別満足度

3.3.1.1. 方法

「授業アンケート」の項目番号18「この授業を受講して総合的に満足している」かどうかについて、新カリキュラム初年度の2011年度から2016年度の科目別平均値をグラフに示した（図１)。分析の対象としたのは、新カリキュラムにおける新設３科目（標準的な履修パターンでは必修）である。なお、再履修者専用クラスは除外した。回答形式は５段階評価となっており、「非常にあてはまる」を２、「ややあてはまる」を１、「どちらともいえない」を０、「あまりあてはまらない」を－１「全くあてはまらない」を－２として平均値をとった。

3.3.1.2. 結果と考察

「アカデミック英語（リスニング)」および「アカデミック英語（ライティング)」の満足度は、「やや満足している」レベルをコンスタントに超えている一方、「アカデミック英語（リーディング)」では初年度よりは高くなったものの「やや満足している」レベルには届いていない。いずれの科目においても2014年度以降は平均値にほとんど変化がみられないことから、英語教育カリキュラムの見直しを進める潮時なのかもしれない。とりわけ、読解科目の満足度については旧カリキュラム時代から低めであるため、ＦＤ等の実施により何らかの改善が望まれるところである。

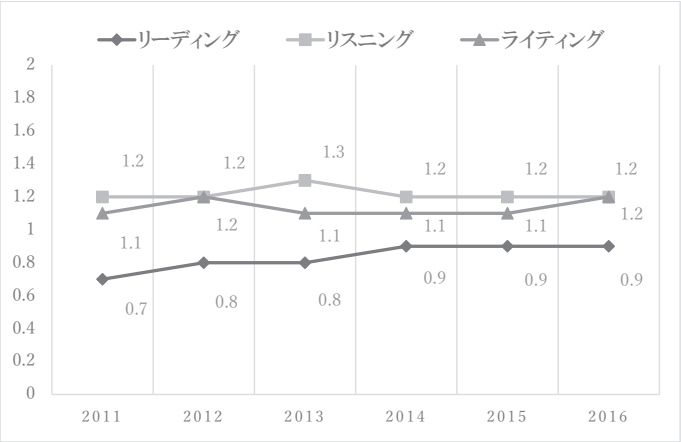

図1　アカデミック英語科目群　満足度

3.3.2. 2016年度における新カリキュラム授業評価項目等の記述統計量

3.3.2.1. 方法

つぎに、新カリキュラム最終年度となった2016年度における「授業アンケート」等のデータをまとめた。同アンケートの項目番号１、４、15、18がそれぞれ「出席状況」「自学自習」「達成感」「満足度」を測定するものとみなし、クラスごとに平均値を集計して分析に用いた（斉田　2009）。各項目のアンケート調査票上の表記は次のかぎ括弧内のとおりである。

項目番号１　「この授業にはどのくらい出席しましたか」（出席状況）
項目番号４　「時間外に自発的にこの授業に関して自学自習をした」（自学自習）
項目番号15　「この授業の達成目標は、達成された」（達成感）
項目番号18　「この授業を受講して総合的に満足している」（満足度）

各項目の回答形式は５段階評価となっており、「非常にあてはまる」を２、「ややあてはまる」を１、「どちらともいえない」を０、「あまりあてはまらない」を－１「全くあてはまらない」を－２として平均値をとった。出席状況については、全回出席、１～２回欠席、３～４回欠席、５回欠席、６回以上欠席、から選択するようになっており、順に２、１、０、－１、－２の数値に置き換えた。

これらの４項目に加え、担当教員による成績評価（０～100点）およびTOEIC IPスコアのクラスごとの平均値と、各クラスの履修者数を分析に加えた。成績評価に関しては、「アカデミック英語（リーディング）」にてNetAcademy2の課外学習を20％の割合で反映させているほかは、すべて各担当教員の裁量に任せられている。

3.3.2.2. 結果と考察

表２に、新カリキュラム科目「アカデミック英語（リーディング）」「アカデミック英語（リスニング）」「アカデミック英語（ライティング）」の合計193クラスにおける「出席状況」「自学自習」「達成感」「満足度」「成績」「TOEIC IP」「履修者数」の記述統計量を示す。なお、アンケートの提出がなかった４クラス（すべて「アカデミック英語（ライティング）」）

は分析から除外した。

「出席状況」の平均値は1.59であり、「達成感」および「満足度」の平均値は「ややあてはまる」のレベルであった。これらの項目については歪度も負であることから、比較的良好であると言えよう。他方、「自学自習」の平均値は0.69と際立って低かったが、歪度は負であることから、自学自習をほとんど行わない履修者は少ないのではないかと考えられる。「成績」の平均値は「優」に該当する80.99であった。ただし、「成績」を指標として用いるには一定の標準化が求められよう。以上の傾向ついては、2014年度の調査においても観察されている（ハドリー　2017）。

表２　2016年度新カリキュラム授業評価項目等の記述統計量

	クラス数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	歪度	尖度
出席状況	193	0.90	2.00	1.59	0.21	−0.53	0.02
自学自習	193	−0.60	1.60	0.69	0.42	−0.53	0.25
達成感	193	0.30	1.70	1.10	0.27	−0.35	0.20
満足度	193	0.00	1.80	1.12	0.35	−0.50	0.16
成績	193	40.30	95.70	80.99	6.22	−1.41	8.55
TOEIC IP	193	230.00	708.10	485.30	85.10	−0.11	0.06
履修者数	193	16.00	48.00	33.48	7.04	−0.26	−0.66

つぎに、科目別の平均値および標準偏差を表３に示した。第１学期開講の２科目に関しては、2014年度の調査結果とほぼ同じく次のような傾向が見られた。まず、日本語母語話者教員が担当する「アカデミック英語（リーディング）」では、「自学自習」の平均値は比較的高いが「達成感」や「満足度」は他科目より低くなっており、「自学自習」の努力が報われていないように見受けられる。今後は効果的な自主学習の指導が望まれるところである。他方、主に英語母語話者教員が担当する「アカデミック英語（リスニング）」では、「達成感」、「満足度」とも履修者から高めの評価を受けているが、「自学自習」の平均値がかなり低い。自主学習を促進することができれば、聴解力のさらなる向上が期待される。

第２学期開講の「アカデミック英語（ライティング）」では、中・上位クラスを「アカデミック英語（リスニング）」を担当する英語母語話者教員が、下位クラスを日本語母語話者教員が担当している。2014年度には「出席状況」が比較的低かったのだが、2016年度では他の科目に近づくまで改善した。「達成感」、「満足度」とも比較的良好で、「自学自習」に関してもリスニングよりは頻繁に行われているようである。

表３　2016年度新カリキュラム科目別の授業評価項目等の平均値（標準偏差）

科目名	出席状況	自学自習	達成感	満足度	成績	履修者数	対象クラス数<クラス総数>
AER	1.59(0.19)	0.88(0.33)	0.96(0.25)	0.90(0.33)	81.57(4.62)	38.19(4.11)	58<58>
AEL	1.67(0.16)	0.41(0.43)	1.10(0.27)	1.23(0.36)	81.35(5.51)	38.22(4.10)	58<58>
AEW	1.52(0.24)	0.75(0.35)	1.20(0.24)	1.20(0.29)	80.28(7.63)	26.36(3.83)	77<81>
3科目全体	1.59(0.21)	0.69(0.42)	1.10(0.27)	1.12(0.35)	80.99(6.22)	33.48(7.04)	193<197>

AER, AEL, AEW＝「アカデミック英語（リーディング）」「同（リスニング）」「同（ライティング）」

3.3.3. 2016年度における新カリキュラム授業評価項目等の相関係数

3.3.3.1. 方法

表２の「出席状況」「自学自習」「達成感」「満足度」「成績」「TOEIC IP」「履修者数」の７項目についてピアソンの積率相関係数を求め、表４に示した。

3.3.3.2. 結果と考察

2014年度の調査結果と同様、今回も唯一強い相関が認められた項目は「満足度」と「達成感」であった。しかしながら、この「達成感」に関しては、アンケート調査票の文言が「この授業の到達目標は、達成された」となっているため、教員によって達成されたと解釈した履修者がいた可能性は否定できない（ハドリー　2017）。

弱い有意な相関が認められたのは、「成績」と「出席状況」との間、「成績」と「TOEIC IP」との間、「出席状況」と「履修者数」の間だけであった。2014年度の調査結果では、「成績」「TOEIC IP」は「満足度」「達成感」との間にそれぞれ弱い有意な相関が見られたが、今回の調査からはそのような結果は得られなかった。何が履修者の満足度や達成感と関連があるのか、数字からは見えてこない。「自主学習」に至っては、どの項目とも有意な相関が認められなかった。ここからも効果的な自主学習の促進が今後の課題であると考えられる。

表４　2016年度新カリキュラム科目の授業評価項目等の相関係数

	出席状況	自学自習	達成感	満足度	成績	TOEIC IP	履修者数
出席状況	1.00						
自学自習	.05	1.00					
達成感	.11	.18	1.00				
満足度	.18	.06	.82 *	1.00			
成績	.29 *	.10	.18	.19 *	1.00		
TOEIC IP	.11	−.10	.14	.04	.23 *	1.00	
履修者数	.20 *	−.11	−.17	−.11	.14	−.03	1.00

*相関係数は１％水準で有意（両側）

４．　まとめと今後に向けて

本稿では、継続研究として2015年度および2016年度の改定版新潟大学全学英語教育カリキュラムの成果を、TOEIC IPスコア、NetAcademy2を利用した課外学習状況、学生による授業アンケート調査、教員による成績評価、クラス・サイズの各データを用いて検証した。TOEIC IPスコアや課外学習状況からは、新カリキュラムのもとでの安定的な教育効果が示唆された。授業評価や成績評価等のデータ分析からは、読解授業の改善、効果的な自主学習の促進、成績の標準化等の課題が見えてきた。

新潟大学では、全学英語教育カリキュラムの抜本的な改革が2019年度に予定されている。非常勤講師を含む全担当教員対象のＦＤ等により上記の課題の改善に努めるとともに、より適正な成果検証のために、学生の英語運用能力を適正に測定する試験を導入し、事前・事後の最低２回実施することが望まれるところである。

謝辞

本稿で使用したデータは、新潟大学学務部教務課の神長真晴氏、渋谷洋平氏、江部早苗氏よりご提供をいただきました。ここに記して感謝いたします。本稿に誤りがあれば責任は著者にあります。

参考文献

ハドリー浩美（2017）新潟大学全英語教育カリキュラム改定の成果検証．新潟大学高等教育研究4：1－9

国際ビジネスコミュニケーション協会TOEIC運営委員会（2012） TOEIC IPテスト平均スコア比較表【2011年度】国立大／公立大／私立大別

国際ビジネスコミュニケーション協会TOEIC運営委員会（2013） TOEIC IPテスト平均スコア比較表【2012年度】国立大／公立大／私立大別

国際ビジネスコミュニケーション協会TOEIC運営委員会（2014） TOEIC IPテスト平均スコア比較表【2013年度】国立大／公立大／私立大別

国際ビジネスコミュニケーション協会TOEIC運営委員会（2015） TOEIC IPテスト平均スコア比較表【2014年度】国立大／公立大／私立大別

国際ビジネスコミュニケーション協会TOEIC運営委員会（2016） TOEIC IPテスト平均スコア比較表【2015年度】国立大／公立大／私立大別

国際ビジネスコミュニケーション協会TOEIC運営委員会（2017） TOEIC IPテスト平均スコア比較表【2016年度】国立大／公立大／私立大別

新潟大学全学教育機構英語教育企画開発室（2010）平成23年度全学英語カリキュラム改定について．
http://www.iess.niigata-u.ac.jp/eigo/english_education/3rd_FD2.pdf
（参照日2017.07.09）

斉田智里（2009）大学英語教育カリキュラム改革による授業評価と成績評価の改善報告：全学授業評価調査データ分析による改善効果の検証．*ARELE: annual review of English language education in Japan* 20: 271-280